

主 題：私たちの言葉

聖書箇所：エペソ人への手紙4章29節

きょうのメッセージのタイトルは「私たちの言葉」です。私たちの口から出ることばについて、一緒に学んでいきたいと思います。

皆さんはヤコブが記したこのみことばをご存じでしょうか。ヤコブ書3：2に「私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。」と書かれてあります。皆さんはことばでの失敗を経験されたことがあるでしょうか。私はあります。言うべきことをちゃんと伝えなかったことば足らずの失敗。また反対に、言わなくても良いことを言ってしまった言い過ぎの失敗。また自分は良いと思って伝えたことばが相手に配慮を欠いたことばであったり、また愛のないことばで相手を傷つけてしまったりと、ことばによる失敗は本当に数多く挙げることができます。「ああ、私も同じようにことばによる失敗を経験しました。ことばは難しいです」と、思われた方が多いのではないのでしょうか。そしてヤコブはこの後3：9－10でも「9 私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。10 賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。」と述べています。私たちは今、主を賛美しました。私たちは口から出る賛美をもって神様をほめたたえ、またほかの人に喜びを与えたり、励ましを与えたりすることができます。しかし、時には同じ口から出ることばが相手に苦しみを与えたり、悲しみを与えたり、そして相手の歩みのつまずきとなってしまふことさえあります。ことばは本当に難しいものです。

☆モーセとアロンの関係性

旧約聖書の中にも、ことばに関してこのような記述があります。出エジプト4：10－16をお読みします。「10 モーセは【主】に申し上げた。「ああ主よ。私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」11 【主】は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、【主】ではないか。12 さあ行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたの言うべきことを教えよう。」13 すると申し上げた。「ああ主よ。どうかほかの人を遣わしてください。」14 すると、【主】の怒りがモーセに向かって燃え上がり、こう仰せられた。「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼がよく話すことを知っている。今、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぼう。15 あなたが彼に語り、その口にことばを置くなら、わたしはあなたの口とともにあり、彼の口とともにあって、あなたがたのなすべきことを教えよう。16 彼があなたに代わって民に語るなら、彼はあなたの口の代わりとなり、あなたは彼に対して神の代わりとなる。」。モーセは自分自身を「ことばの人ではありません」と言っています。おそらくモーセは民に語ることが苦手だったのでしょう。神はその代弁役にモーセの兄アロンを立てられました。そして神はこの後、モーセとアロンを用いられます。きょう私たちは、私たちのことばについてみことばが何を教えているのかを一緒に見ていきたい、このように思います。

1. 人のことばの出るところ マタイ12：34－35

a. 「心に満ちていることを口が話すのです」

私たちのことばは、どこから出てくるのでしょうか。この質問を子どもたちにしたら、きっとこんな答えが返ってくるでしょう。「口から出てくるよ。おじさん、知らないの」、おそらく子どもたちはこう言うでしょう。確かに私たちが話すことばは口から出てきます。またある人は手話でことばを伝えるかと思っています。口から出てくることばも、手話で伝えることばも、実は私たちひとりひとりの心から出てくるのです。ルカ6：45に「なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」とあります。また、ヨブ

8：10では「:10 彼らはあなたに教え、あなたに語りかけ、その心からことばを出さないだろうか。」と書かれています。私たちのことばが私たちの内側、心から出てくることを私たちはよく知っています。それは良いことばも悪いことばも確かに私たちの心の状態が口からことばとなって出てくるからです。

マタイ12：34－35には「:34 まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましょう。心に満ちていることを口が話すのです。:35 良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」と書かれています。34節の後半に「心に満ちていることを口が話すのです。」とあります。私たちはこのみことばを聞く時に、すぐ理解できます。なぜでしょうか——。それは私たちの内側、心の考えや思いがことばとなって口から出てくることを知っているからです。良いことばも、悪いことばも、確かに心から出てきます。その時の私たちの心の状態をことばとして語っているからです。心が私たちのことばの出るところなのです。

では、心とはどういうものなのでしょう。それは私たち人の内側の全体を指すことばです。思考や感情、意思など、私たち人間の存在の根幹に関わる場所です。そして心は私たちの性質の源です。その人の清さ、あるいは汚れの生まれてくるところでもあります。それゆえに聖書は心を清め、神に喜ばれる状態に心を保つことを教えています。マタイ5：8に「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。」と書かれてあります。私たちの心こそ、私たちのことばが出てくるところなのです。

b. 「良い人は、良い倉から良い物を取り出すものです」

そして、同じマタイ12：35には「良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」とあります。「倉」というのは、物を蓄えておく場所です。ここでは、私たちの心を比喩的に表現したものになっています。「良い倉」とは良い物が蓄えられている倉です。そしてそこには良い物だけが蓄えられているから、当然、そこからは良い物が出てくるのです。私たちの口から出る良いことばは、良い倉から、良い心の状態から出てくるのです。ルカ6：45「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し」、このように記されてあります。

☆私たちの信仰において

さて、私たちの信仰について少し考えてみましょう。パウロはローマ10：10でこう述べています。「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」と。確かに私たちは心でイエス様を受け入れました。イエス様の贖いのわざである十字架とイエス様の死からの復活を、心から信じました。その信じる信仰によって私たちは罪赦され、神は私たち信じる者を義なる者として宣言されました。そして私たちは自分の信仰の決心をこの口で神に告白したのです。私たちの信仰も私たちの心から出たもの、すなわち主イエス・キリストを信じる信仰告白のことばも私たちの口から出たのです。私たちは心からの真実な思いをこの口からことばとして語ったのです。

c. 「悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです」

そして35節は後半、「悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」と記してあります。それは悪い倉には悪い物しか蓄えられていないからです。私たちの悪いことばは悪い心の状態、汚れた心の状態から出てくるのです。それは私たちの心そのままの思いや考えが、私たちのことばとなってこの口から出てくるのです。この聖書箇所はリビングバイブルでは「しかし、悪い人の心の中は悪意でいっぱいです。」とありました。

☆律法学者やパリサイ人たちの姿

この聖書を見る時に、イエス様は律法学者やパリサイ人たちを激しく糾弾しています。「:27 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。」(新改訳第二版)、このように呼んでいます。なぜイエス様は彼らをこう呼んだのでしょうか。ここで私たちはあることばを調べてみましょう。それは「偽善者」ということばです。この「偽善者」を表すギリシャ語は、もともととはさまざまな役を演じる俳優を指すことばでした。後に、このことばは「偽善者」を意味するようになったのです。俳優は自分とは違う多くの人が演

じます。自分は現さないけれども、自分と違う人たちを演じる者、それが俳優です。だから後にこのことばが「偽善者」と使われるようになったこと、よくわかります。この律法学者やパリサイ人たちについてイエス様は、マタイ 23 : 3－7 でこう述べています。「:3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい。けれども、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。:4 また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。:5 彼らのしていることはみな、人に見せるためです。経札の幅を広くしたり、衣のふさを長くしたりするのもそうです。:6 また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、:7 広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです。」と書かれています。律法学者やパリサイ人たちは確かに人々に律法を教えていました。しかし、みことばを読む時に、彼らはそれを実践していなかったと書かれています。この彼らの姿は、人によく見せるための偽善者そのものの姿だったのです。

そのような彼らに対して、この 23 章の後半 27－28 節を見ると、イエス様の厳しい非難があります。「:27 忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいのように、:28 あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」(新改訳第二版)、このようにイエス様は述べています。彼らの外側の態度やことば、それは人からは確かに正しいもののように見えていました。しかし、その内側——心は汚れていて、罪で満ちあふれていたのです。その外側に現れたことばや態度、それは偽善的なものでした。内側の汚れを隠したものだだったのです。ですからイエス様は「不法でいっぱい」と言われました。イエス様は、律法学者やパリサイ人たちの心が不法で満ちていることを厳しく責められたのです。

私たちの主は、私たちの心を見られるお方です。I サムエル 16 : 7 には、「……人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」と書かれてあります。ウィリアム・バークレーという先生は、ことばについてこう述べていました。「人の心の状態は、その人が話す言葉によって知られる。昔、ギリシャの劇作家メナンドロスは『人間の性格は言葉によって知られる』と言った。心にあるものは唇に上る。心に思っていることだけが口に出てくる。言葉ほど人の本質をあらわすものはない。少し話をしていれば、相手の心がきれいにかきたないかがわかるし……」、「人は怒ったときに、冷静なときには決して言わないことを言う。あとになって、そんなつもりではなかったと言っても、それで一度口にした言葉の責任からまぬがれることはできない。(中略)ギリシャの哲人ピタゴラスは、『やたらな言葉を吐くより、石をやたらに投げたほうがよい』と言った。人を傷つける言葉、人を汚す言葉は、一度口を離れれば二度と戻らず、行く先々で人を傷つけていく。われわれは自分を反省し、また自分の言葉を検討して自分の心の状態を知らなければならぬ。」と。

2. 私たちの口から出てくることばに対する教え エペソ 4 : 29

今、私たちは、私たちの口から出てくることばが私たちの心から出てくるものであることを知りました。ことばは心の発露、また心の正直な表現なのです。とすれば、私たちは正しいことばを述べ、このことばをどのように正しく用いるべきかを考える必要があるのではないのでしょうか。パウロは私たちのことばの用い方についてエペソ 4 : 29 で教えてくれています。

エペソ 4 : 29

「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」

A. 否定的な面

①「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません」

この 29 節で、パウロはまず否定的なことを述べています。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。」、私たちクリスチャンはすべての偽りだけでなく、悪いことばをことごとく避けなければなり

ません。ここで用いられているこの「悪い」ということばですが、「腐っている」ということばが使われています。そこから「価値がない」という意味が表されています。相手に対して腐ったことば、あるいは価値のないことばをかけることは、良い影響を与えないだけでなく、時には相手を傷つけ、また害を与えるかもしれません。ですから、そのようなことばをいっさい口から出してはいけないということです。この「いっさい」は「絶対に」ということです。絶対に口から出してはいけませんということです。

またパウロは、同じこの手紙の5：4でもことばに関してこう述べています。「また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。」。私たちが悪いことばを口にする時、続く4：30で「神の聖霊を悲しませてはいけません。」と書かれているように、私たちのうちに住まれる聖霊が悲しまれます。なぜ聖霊は悲しまれるのでしょうか。ご存じのように、聖霊は私たちを教え、導いてくださるもうひとりの助け主です。イエス様はこう言われました。ヨハネ14：16で「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」、また同じヨハネ16：13では「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」とあります。聖霊は私たちを教え、導いてくださるもうひとりの助け主です。そしてその聖霊は私たちのうちに働いて、私たちひとりひとりをイエス様に似た者へと変え続けてくださるお方です。パウロはⅡコリント3：18で「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」と述べます。この聖化の過程の中で、聖霊は私たちの罪の一つ一つを取り除いてくださいます。ですから、私たちが罪を犯すその時、私たちが罪の中にいるその時、聖霊は悲しまれるのです。

パウロは悪いことば以外にも、聖霊が悲しまれる罪について、エペソ4：25－28で語っています。見てみますと、25節では偽りを語ること、また26節では怒りを持ち続けること、28節では盗むことなどです。悪いことばだけでなく、罪と言われるすべてのものを私たちは捨て去りましょう。なぜならこの4：22で記されている「古い人を脱ぎ捨てる」ことになるからです。そして私たちはへりくだって、すべてのことを聖霊に明け渡ししましょう。聖霊の導かれる生き方こそ、新しい人を身につけることなのです。私たちが、うちにおられる聖霊を悲しませることが決してあってはいけないのです。30節に書かれているこの「神の聖霊を悲しませてはいけません」は、現在形の命令で書かれています。それは聖霊を悲しませ続けてはいけないということです。もし今、聖霊を悲しませている方がおられましたら、ぜひ罪を告白し、罪から離れ、聖霊に従って歩んでいきましょう。

B. 肯定的な面

①「ただ、必要な時」

パウロは否定的な面を述べた後で、肯定的な面を述べています。「ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」。ここで「ただ」と訳されている接続詞は、「そうではなくて」という意味を持っています。ですから悪いことばを口から出すのではなくてということです。そして「必要なとき」、それは「ふさわしいとき」とか、「時宜にかなった」という意味です。箴言15：23に、「良い返事をする人には喜びがあり、時宜にかなったことばは、いかにも美しい。」、また同じ箴言25：11には「時宜にかなって語られることばは、銀の彫り物にはめられた金のりんごのようだ。」と書かれてあります。

②「人の徳を養うのに役立つことばを話し」

悪いことばを語るのではなくて、その時にふさわしいことば、そして「人の徳を養うのに役立つことばを話し」と書かれています。2017年度版の聖書を持ちの方は、「人の成長に役立つことばを語り」と記されてあると思います。この「徳を養う」と日本語に訳されているギリシャ語は、「教化」、「建て上げる」、「高める」また「築き上げる」という意味を持ったことばが使われています。この同じギリシャ語のことばが

ローマ 15 : 2 では「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」とありますが、この「徳を高め」ということばが同じことばです。また同じことばが I コリント 8 : 1 の後半、「……しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。」の「徳を建てます」に同じことばが使われています。また、「役立つことば」というのは、「相手に対して良い影響を与えることば」のことです。

そしてここでは、「悪いことば」と「役立つことば」が対比されています。この「人の徳を養うのに役立つことばを話し」、これはこういう意味です。私たちは他の人々の教化のために、また霊的成長のために、ふさわしい時に、適切な良いことばを語ることが大切だということです。私たちの口から出ることばは、他の人々の霊的成長に良い影響を与え、相手の益とならなければならないということです。決して害を与えてはいけません。パークレー師は「クリスチャンは隣人に役立つことばを話すという特徴を持っていないといけない」と述べていました。ヨブ記の中で、テマン人エリファズがヨブについて語ったことばが、ヨブ 4 : 4 に「あなたのことばはつまづく者を起こし、くずおれるひざをしっかりと立たせた。」と記されています。ヨブの語ったことばは相手に益を与えたのです。

③「聞く人に恵みを与えなさい」

そして 29 節の最後、「聞く人に恵みを与えなさい。」とあります。私たちは単に真実で聖いことばを使っているかどうかではなくて、私たちの口から発することばは、聞く人たちに恵みを与えるものでなければいけないということです。パウロはコロサイ 4 : 6 で「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。」と述べています。私たちにはそれぞれに御霊の賜物が与えられています。この御霊の賜物が与えられている目的をパウロは I コリント 12 : 7 で「みな人の益となるために、おのおのに御霊の現れが与えられているのです。」と述べています。それと同様に、私たちのことば自体も聞く人にとって益となるために、私たちの心に浮かんだ良いことばが口から出ていかなければなりません。相手にとって恵みとなり、また祝福とならなければいけないということです。

3. まとめ

最後、まとめです。私たちはきょう私たちの口から出ることばについて学びました。

① 私たちの口から出ることばは、私たちの心から出てくるものです。私たちの心の状態が良いことばを出したり、また悪いことばを出したりします。ですから私たちは、自分の心を正しく吟味する必要があります。そして良い状態（聖い状態）に心を保つ必要があるのです。それはうちにおられる聖霊の働きにすべてゆだねることです。

② 私たちのことばがいつも塩味のきいたことばであって、聞く人たちの霊的成長に益をもたらし、また恵み、祝福を与えるものである時、うちに住まわれる聖霊の喜びが私たちのものとなるのです。ですから私たちは心を吟味して、私たちの口から良いことばを出すことが必要です。

最後に、箴言 13 : 3 にこう書かれてありました。

「自分の口を見張る者は自分のいのちを守り、くちびるを大きく開く者には滅びが来る。」